

赤潮予察調査事業  
特殊プランクトン予察調査  
—陸奥湾海域—  
(要 約)

尾坂 康・天野 勝三・直江 春三・橋本 勲・金田一拓志  
(以上青森県水産増殖センター)・秋山由美子・古川 章子・  
宮田 淳子・小鹿 晋(以上青森県衛生研究所)

この調査は、陸奥湾における脂溶性貝毒による貝の毒化状況、容疑プランクトンの出現状況、及び発生環境を調査し、原因プランクトンを解明することを目的としたものである。詳細については、脚註の資料に報告済みであるのでこれを参照されたい。

調 査 方 法

調査海域 陸奥湾  
調査項目 気象・海象観測、プランクトン調査、貝毒・毒力測定、ホタテガイ中腸腺胃内容物の検鏡、24時間定点観測(容疑プランクトンの日周変化の追跡)、容疑プランクトン全湾分布調査、容疑プランクトンの培養実験。  
調査時期 昭和54年4月～55年3月

調 査 結 果

- (1) 陸奥湾における毒力は最高1.0 M.U./gと低目に推移し、毒力のピークは、5月の上・中・下旬にみられた。
- (2) 採水プランクトン中の*D. fortii*の出現時期と毒化の時期が一致していた。
- (3) 毒力の高い値が検出されたホタテガイ中腸腺胃内容物から*D. fortii*が量的に多く検出された。
- (4) 青森、野辺地の地まき貝胃内容物の*D. fortii*の数は非常に少なく、毒力もNDであった。
- (5) *D. fortii*が多くなり、毒力の高くなった5月の水温は、8.0～13.0°の範囲であった。
- (6) 24時間観測の調査では、*D. fortii*の日周変化は認められず、主に水深16m～底層に多くみられた。この時の水温は12.9～13.9℃であった。
- (7) *D. fortii*は7月に入って、底層水温で15℃、表層水温で20℃を越えた頃に減少したものと思われ、7月30日、31日の湾内23地点の分布調査では、ほとんどみられなかった。代わりに*D. mitra*が多く出現していた。

以上のことから脂溶性貝毒の原因プランクトンは*D. fortii*であることが推定された。



詳細については、「昭和54年度赤潮・特殊プランクトン予察調査報告書(東北・北海道ブロック)水産庁、昭和55年5月」に報告済み。